

セブンスデー・アドベンチスト
SDA

アドベンチスト
はるしゆく

December

12

「もう寂しくなんかない」

東京中央教会国際部牧師 ヒューゴ・アロー

この病んだ社会における重大な問題の一つは孤虫です。教会の家族でさえも、孤虫と呼ばれるこの病に侵されることばかりありません。かつて、教会在籍20年以上の人たちに質問を試みたことがあります。「危機に際して助けを求めよう人を少なくとも三人持っている人はいますか」と。残念ながら、手を挙げたのはほんの数人だけでした。こうした現実を変えるためのいくつかの方法を試みることはできますが、しかし少なくとも神様との和解を継続的に知らなければ、お互いの齟齬はありえません。なぜならば、もしも神様が赦され受け入れられたということを継続して知ることができれば、心の中はほけるような喜びが湧き、この喜びが、お互いを赦し合、受け入れる能力を与えてくれるからです。

今日は、キリストを否定したときのペテロのことを思います。彼の継続した救い、主からの離反は過酷なものでした。なぜならイエスは「...見よ、サタンはあなたを妻のようにふるまうにけることを願って許された。しかし、私はあなたのために、信仰がなくなるといって祈った。だから立ち直ったら、きょうは、あなたを打つてやりなさい（ルカ22:31,32）」と、予めペテロに言っておられたからです。

シモンが主を否定了らうとイエスに警告されたとき、シモンはそれを激しく否定しました。イエスは可成り起ることを知っておられたので、シモンの過ちにも拘らず、赦しと受容の保証を彼に与えたのです。

ペテロの霊的孤虫の瞬間を振り返ってみましょう。鶏が鳴き、ペテロは「今日、鶏が鳴く前に、三度私を知らないと申すであろう」という主の言葉を思い出し、激しく泣きます（ルカ22:60-62）。確かに、物質的・情緒的な孤虫は辛いものでしょう。しかし、神様との関係が断たれ信仰が

失われ、永遠の別離の感情に満たされることとは比べものにならないと思います。

つまり倒れると、人はとにかく、もうチャンスはない、以前の生き方に戻るほうが簡単だ、と考えがちです。ペテロもそうでした。聖書には「シモン・ペテロは彼らに『私は漁に行くのだ』と言った」（ヨハネ21:3）とあります。イエスはまさにその瞬間に現れます。そして「あなたはこれらの人たちが愛する以上に私を愛するか」（ヨハネ21:15）と言います。このイエスの言葉は、まるで「もしそうなら、なぜ私を否定したのか」と言っているかのようです。しかし、このあとで繰り返される質問をよく見ると、実はこれと反対のことを言っていることがわかります。借金をした二人の人が共に金貸しにゆるされるといって話で、この二人のうち「どちらが彼を多く愛するだろうか」と問われ、シモンが「多くゆるしてもらったほうだと思います」と答えると、イエスは「あなたの判断は正しい」（ルカ7:41-43）と言われます。

確かにペテロの過ちはとてつもなく大きなものでした。しかし、そうだからといって、古い生活に戻る理由はありませんでした。なぜなら、イエスの赦しはペテロの過ちよりもはるかに大きいものだからです。今やペテロの霊的孤虫は、救われ立ち直り、神に与える使命を担うこととなります。

そうです、今日、あなたも同じ質問を投げかけられます。「私を愛するか」と。神様の赦しと受容を継続し、場合のみ、人は孤虫でなくなるのです。そして「立ち直ったときには、きょうは、あなたを打つてやりなさい」という使命に与るのです。



「導かれて」

三井 清子

房総の南、大原に、二歳から十八歳までの子供達のいる養護施設がある。私はここで三育学院の学生ボランティアの方達と出会った。ルーテル教会の米人宣教師の方が造られた施設で、かつては私も園長の影響で教会に属していたが、市川から成田、大原と移転したこともあって、その頃は教会から離れていた。神様を知らなから背を向けて、でも困難に出会うと「神様！」と叫ばずにはいられない身勝手な私に、学生さん達の純粋な神への姿勢はまぶしかった。彼らは、週一回の学習指導に加えて、休日には、汗を流して子供達と遊び歌って下さった。

私が前の教会を離れたことを話した時、「信仰の方向がまちがっていたのです」という、高校生の少女的的を射た答えに、その真直ぐな確かな考えに驚かされた。そのとおりで、私を、人を見ていたのだった。「あなたの愛を」と題して二人で作られた歌のテープは、子供達も私も大好きで、小さな誕生会に、また幼児を寝かせる時によく唄った。「忘れないで。いつもイエス様は君のことを見つめている。だからいつも絶やさなで、胸の中の微笑みを」。この子達が就職して独りで社会の嵐の中に立たされた時、私の子守唄代わりのこれらの歌をふと思い出してくれたらいいな...と願いながら、唄った。

渡米前に頂いた『キリストへの道』、また、卒業の時に一年分の『サインズ』とホワイト夫人の本を下された方、お別れに心から祈って下さった方、若者達の真摯な祈りは、温かく優しく私の心に浸み込んでいった。

やがて、当時神学生だった中村先生、英田先生との週一回の学びが始まった。楽しい時であったが、ときには自責の念に胸つまらせた日もあった。そして、いつかこの集いが私にとって聖なる場と変わっていった。初めて学院教会の礼拝に行った時、どこからか「帰っておいで」と差し伸べられたみ手を見たような気がした。こんな私を、あの少女の日「力を尽くして狭き門より入れ」のみ言葉を覚えた日から、長い長い間、様々な方を通して導き見守り待ち続けられたみ神の愛に胸がつまった。

1984年、その後も大変お世話になった藤田潔先生司式のもと、バプテスマを受けた。さわやかな美しい五月の朝であった。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。」(哀歌3:22,23)

(1984年5月19日受浸)



原宿彩彩

本日、山谷伝道所へ参ります

寒さが身に沁みるようになりました。この寒さに身を縮めて耐えている、年老いたホームレスの方々には、心が痛みます。教会では年に2回、山谷伝道所を通してこれらの皆様方に、心ばかりですがご支援をさせていただいて参りました。そして本日(7日)午後、お米、野菜等の食糧と日用品、中古衣料、そして軍手と靴下をセットにしたクリスマスのプレゼントなどを、山谷伝道所にお届けに参ります。皆様御協力有難うございました。

(渡部正廣)

安積力也先生からのお手紙

「真実な『応答』の数々、有難うございました。深く準備された魂に向かって語ることを許されたのだと、改めて思いました。...」はらじゆくニュース11月号で特集した家庭会セミナーの感想を講師の安積先生にお送りしたところ、このようなお返事をいただきました。

メリ・クリスマス！
ご愛読ありがとうございます。
来年もどうぞよろしく。
—コミュニケーション部—



「変わる、変わる、変わる」 — beehive この一年



東京中央教会副牧師 花田 憲彦

先月、「beehive一周年記念LIVE」を行いました。昨年の10月からはや一年。のべ3,000人ほどの方々がLIVEに参加されました(平均56名)。毎週、伝道集会をやることは大変なことです。地下の部屋から重い音響機材などを2階の会堂まで運び、準備をいたします。マンネリ化の危機にはいつも、「なぜ我々はこれを行っているのか」「何を目的としているのか」と問い続け、聖書の中からその答えを見だし、動機付けを行ってきました。現在は、コーディネーター、受付・フォローアップ、プレイズ(賛美)、祈りのミニストリー、アウトリーチ(伝道・奉仕活動)企画、PA、プロモーションプロジェクトの、七つの小さなチームに分かれて、活動を行っています。また、ハンドベルやゴスペル、スポーツなどの活動もあります。

LIVEのほかにも、スキーやハイキング、ドライブ、日韓共催beehive Shaking Tokyoなど、楽しい思い出とともに、青年たちの霊的成長の跡を見ることが出来ます。最初は恐る恐る

やっていた、街頭での伝道や奉仕活動も板についてきました。現在、ゴスペル教室のスタッフの一員であるFさんや、礼拝に参加しているKさんは、街頭でチラシを受け取ったことがきっかけで、仲間に加わりました。自殺を思いとどまった方もおられました。

この間、5名がバプテスマを受け(村上君=八王子、中野西君、茂木さん、中居君、岡崎君=中央)、2名が神学部へと進みました(松枝君=ウイマー、平賀君=三育学院)。来年度も、三育学院をめざす志望者が数名います。原宿から人材が抜けていくのは寂しいことですが、beehiveのモットーは「私が変わる、教会が変わる、日本が変わる」です。日本を変える優秀な人材を輩出するミニストリーでありたいと願っています。

これまで献金や献品、祈り、温かなまなざしをもってこの働きを支えてくださった中央教会の皆様、心から感謝しています。今後もどうぞよろしく願いいたします。

キッズパワー
に乞ご期待!

14日午後の「子どもクリスマス」とびきり楽しそうですね! 熱のこもった劇のリハーサル、たのもしく拝見!
(YY)

『青い窓U.S.A』第八号(二〇〇一年四月刊)より。同誌は昨年八月号でこの紹介のとおり、福島県郡山市の和菓子のお舗「柏屋」が発行している児童詩集の米国版です。

風
三育学院サンタクララ校
六年 島田恵理子

ときには雨や雷を共にし
嵐になる風
そよ風となり水面をあらず風
どこから来たのかわからない
どこへ行くのかわからない
雲をおし
鳥をのせ
木の葉を共につれながら
いずこへと去って行く、風

詩

バイブル豆事典

「なぜ神はエデンの園に善悪を知る木を置かれたのか？」

神はアダムに「善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」(創2:17)と言われました。しかし、神はなぜ人間を死の悲しみに陥れるような危険なものをエデンの園に置かれたのでしょうか。聖書に「あなたがたは子であるのだから、神は私たちの心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである」(ガラ4:6)と書かれています。すなわち、神は父なる方であり、人間はその息子、娘である。神と人間とは、温かい血の通った親子関係にあるということです。その観点に立って創世記2:17を理解することが大切です。私が5歳の時、末の弟が生後7カ月で亡くなりました。翌朝、冷たいむくろとなった弟を胸に抱いて、かまどの前でご飯を炊いている母を見ました。私はその後ろ姿に母の深い悲しみを見ました。親であられる神ご自身にとり、愛する子である人間が死ぬということを考えてみて下さい! 「取って食べるな.....死んではいけないから」(創3:3)この言葉は親なる神の思いを切実に表しています。ではなぜ神は、敢えて善悪を知る木を置かれたのでしょうか。それは道路の信号機にたとえることができます。母親が子供に「横断歩道は必ずちゃんと信号を見て渡るんですよ!」と教えるのは、子が「死んではいけないから!」です。善悪を知る木は、信号機と同じように人間が幸福に生きるために必要でした。それは「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタ4:4)という大切な真理を教えるためのものでした。

(SDA教団・安息日学校部 鈴木明理牧師)

12月のスケジュール

- 12/ 7 (土) [説] 花田憲彦副牧師 & 子供のお話
役員会
長老会
/ 8 (日) PFC歳末募金
/ 14 (土) [説] 広島三育学院聖歌隊 & 子供のお話
週報 & アドベンチストはらじゅく発送
子供クリスマス 15:00~
/ 15 (日) 英語学校バンケット 16:00~ 19:00
/ 21 (土) [説] クリスマス礼拝withハンドベル
理事会
チャペルコンサート 19:30~
/ 24 (火) 聖歌隊によるクリスマスキャロル 19:00~
/ 28 (土) [説] 板東洋三郎牧師 & 子供のお話
洗足・聖餐式
/ 28 (土) ~ 29 (日) PFC三ツ峠山ハイキング
1 / 1 (水) 元旦礼拝 11:00~

教会のホームページを開設しています。

<http://www.sda.gr.jp>

エデン ED園だより

もう12月。紅葉も落ちてきて、だいが山の景色も冬っぽくなってきました。また、気温もだいが下がってきて、寒くなってきました。日本の経済もだいが寒くなってきてるようですが...。先日も、バブル後最安値更新とかニュースでやっていましたが、聖書では、天に財産をつみなさいと教えていますが、株価の動向に一喜一憂してしまいます。私もまだまだですね。だけど、そうはいつでも景気はあがってほしいなあ...

(A.K.)

発行：東京中央教会コミュニケーション部 * 発行人：板東洋三郎 * 編集人：前中靖司
[住所] 〒150-0001 渋谷区神宮前1-11-1 03-3402-1517
* スタッフ：久木田明夫・佐藤敏子・寺内雅子・芳賀洋・平山茂子・森武靖子・山口保夫